

山田正平研究

——周辺の人々とその交友(Ⅲ)——

神野雄 二

一、序

日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立つた体系的な研究はまだ十分なされていないと言えない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指したい。これは書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章⁽¹⁾や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉研究⁽²⁾、並びに彼を祖とする芙蓉派の系譜と目される、源惟良、小俣麴庵、福井端隠、山田寒山⁽³⁾、山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを課題としてきた⁽⁴⁾。また、わが国の印人伝における唯一の專著と言える中井敬所の「日本印人伝」⁽⁵⁾をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専門家はもちろん、篆

刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。本稿はその一環を担うものである。

さて山田正平(明治三十二―昭和三十七)は、日本の篆刻の祖「印聖」と称される高芙蓉の系譜に連なる。清朝以後「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を取り上げている。正平自身四絶の芸術境を目指し、篆刻芸術に命を賭した。正平の成し遂げた類まれな功績を考えるに、わが国における「印仙」と称してもよいだろう。以前筆者は正平の年譜を編んだ⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

私は山田正平をよりよく理解するため、正平と交流した同時代人にインタビューを試みてきた。また書簡にて質問をした。今は鬼籍に入られた方も多い。大学院に在籍していた頃教官から、「文は足で書け。」と教えられた。取材は訪問地に赴き、撮影機具や録音機具、さらに資料一式を携えての過酷なものであった。費用も写真代や、旅費等嵩んだ。しかし、運命とも思える一人の偉大な芸術家との出会いに感謝しつつ、その真実の姿を後世に伝え残したいとの思いが私を揺り動かしていた。今となつては貴重な証言や資料となつたものも多い。ただ初期の頃は調査の方法や取材の方法、記録の取り方の不備や、様々な環

境や条件により不満な点も多い。再度調査する事は難しく、当時のままとせねばならない事も多いが致し方がない。

さて本稿では山田正平をめぐめる人々とその交友について述べる。周辺の人としてこれまでも幾人か取り上げた。過去二回に亘り、正平をめぐめる人々とその交友について言及した⁸⁾。これらは山田正平の事蹟や人物像、芸術観を知るに足るものであった。本稿はそれに次ぐもので三回目として、最も身近な存在であった、正平の妻喜美子（明治三十年（昭和六十二年）を取り上げる。

二、妻喜美子に関して

先ずは妻喜美子に関して、資料を提示し概略述べておく。喜美子自身による、山田寒山の十七回忌を記念して、寒山寺書画篆刻頒布会が催された折の一文を紹介する。「山田寒山翁十七回忌記念寒山寺書画篆刻頒布規定」のパンフレット（昭和八年九月）（図1）の記載によるものである。

池田蕉園先生には七年余り、其後は輝方先生、荒木十畝先生の御教を受け、勉強して居りましたが、家事に忙しき身になりました。時間も、時折画心の起るにまかせて、研究を続けて居りました。此頃は追々子供等も手を離れ、絵筆執る暇も得られるやうになりましたので、丁度亡父の十七年忌を迎へるのをよき記念として、これからは好きな丹青の道に精進したいと存じます。どうぞ宜敷御指導を御願申上げます。

また、別に

「芸術界の新たな、山田寒山師の愛嬢山田蕉宇さん」（「国民新聞」大正七年一月二十四日）（図2）として掲載されている。

余技として竹を描いては天下第一品の評ある山田寒山師の長女です。

本年二十二歳家に在つては家事万端を切り盛りして行く事の能る家庭的の娘さんです。不忍川の辺りのお宅をお訪ねすると優雅な蕉宇さんが出て来られて、丹青の道に志す迄のお話や其後の事に就て種々語られました。

「妾は蕉園先生の絵を見て絵が好きになりました。而して未だに蕉園先生方の御厄介になつてゐるのですが、先生がお亡くなりになつてから画塾は輝方さんお一人で教へてみらつしやいます。然



図1 山田喜美子作墨竹・正平賛（「山田寒山翁十七回忌記念寒山寺書画篆刻頒布規定」パンフレット）



図2 芸術界の新たな 山田蕉宇さん（「国民新聞」大正7年1月24日）

です。ねモウ五六六年にもなりませうか？此頃ちや家事に逐はれて述も皆さんの如うには勉強が出来ません。斯様のを前年巽画會へ出した事があります」と云てお示せになつたのは綺麗な美人画でした。夫から蕉宇さんは又統けて語る「そんな風ですから此頃ちや時々研究会へお伺ひする位ですが、背景を描いたり花鳥を研究したりするには矢張り専門へ行かなければ駄目ですから、荒木十畝先生のお宅へ習ひに伺つてます」と尤も謙遜な態度です。更に今度巽画會へ出品された「秋」に就ての話の聞くと「アレです。かあれは昨年玉川へ遊びに行つた時見て来た実景から思ひ付いた題材です。芒を背景として娘が碁を打つてゐる所ですが、時代は春信の天明時代に致しました」と説明し了ると「父を御紹介致しませう」とて寒山師を呼んでみろつしやいました。師は長鬚を撫しつ、「娘の絵はまだ問題にはなりません。モツと勉強させなくては。・・。」と、話題を転じて高島北海画伯が二十年も前に水彩画を応用した山水を試みたことや、鉄筆のことやらを語られました。

喜喜美子は蕉宇と号し、日本画に専心努力してゐたことが分かる。その画風は伝統的なもので格調が高い。彼女自身が芸術に志してゐたことは、山田正平を理解することに大きく寄与したと思はれる。

三、周辺の人々とその交友一

- ・ 山田正平 喜喜美子 (喜と略す) ・ 令嬢梅枝氏 (梅と略す)
 - ・ 聞き手 神野雄二 (神と略す) ・ 宮坂直樹 (宮と略す)
 - ・ 年月日 昭和五十三年十二月二十五日
 - ・ 場所 東京都荻窪山田家
- (音声不明の箇所は□とした。また内容上記載を伏せた箇所がある。)

神 まず日常的な山田先生の事をお聞きしたいのですが、一緒にずつと過ごしてこられて。山田先生の嗜好品や、趣味など。お風呂が大変お好きだったと梅枝さんからお聞きしましたが。

喜 大体お分かりますワ。そんなもんです。後は忘れてしまつてます。

神 好きな食べ物は。果物、魚、肉など。

喜 何でも好きです。嫌いな物ないです。

神 お体はお元気でしたか、病氣などほとんどされなかつたのですか。

喜 そうなんです。大動脈瘤というのがいつから始まつていたんだか分かりませんが、中国へ行く時にだぶ具合が悪うございました。

大変苦しがつて行きました。

神 死因は大動脈瘤。

喜 腹部大動脈瘤破裂つて言いました。警察病院で亡くなりました。

神 中国へ行かれる前から悪かつたのですか。

喜 はい。どうしても行きたいと。昔長沙まで行つておりましたからね。もう一変見てきたいと。随分苦しかつたようですけども、

それをおして行きました。帰つてきて入院した時は大分良かつたんですけど。

神 それじゃ行く時が一番調子悪かつたのですか。

喜 そうです。行く時が一番調子悪かつたんですよ。

宮 お茶碗やいい絵を買つたときなど、一日中眺めていらつしやつたのですか。

喜 そうです、そうです、よくご存じで。

宮 自分の好きなものには。

喜 寝ずに眺めておりました。そういう好きなものが手に入った時には、

神 一つのものに凝る人でしたか。

喜 そうですね。

神 お酒はすごく好きでしたか。

喜 お酒はすごく好きでしたか。

神 お酒はすごく好きでしたか。

喜 お酒はすごく好きでしたか。

神 お酒はすごく好きでしたか。

喜 お酒はすごく好きでしたか。

梅 若い時は随分たくさん飲んだんでしょ。

喜 若い時はね、それこそ夏先生のお家に行った時なんか、帰りに

ドブなんかに落っこちて帰ってきたりして。(笑)

梅 そんなに量は飲まないんでしょが、すぐ酔っぱらっちゃって。

喜 そうね。

梅 そんなにひどく、一升酒飲むってほどじゃないみたいだけど。

喜 じきに寝てしまいます。

梅 お酒の回りがいいのかしらね。飲んだらもう上機嫌で……。よそ

へ伺った時はもつと飲んでしょうね。あんなにへべれけになっ

ちゃやう、家あたりじゃ経済がそう許さないから。お酒はおいしく

飲んでいたみたいですね。

梅 お酒飲むと面白くなる性質みたいですね。だから皆さん、お酒の

席に呼んで下さるのでしょいかね。

宮 大学へ講義に行つて家に帰ってきた時、何か大学生のことなど話

しませんでしたか。

喜 アルバイトして困るつて言つてました。アルバイトするのが一番

気に入らない。

神 学生は勉強しなきゃいかんという感じでしたか。

梅 遊ぶためのお金を稼ぐのにアルバイトするのはけしからんと、昔

の人の考えじゃなにかしらね。

喜 伊東先生は大変弁解してらっしゃいました。アルバイトしなきゃ

学生は生活できないつて。

梅 アルバイトして首が足りなくなると、先生方が一緒に出てきて後

に座つてらっしゃいました。

梅 先生稼業に慣れてないから全力投球で学校へ出かけていったから、

生徒さんが少ないと、がっかりしちゃうんじゃないでしょうかね。

喜 参考書をもういっぱい持つて、よくあんなに持ってたもんだと思ひ

ます。いっぱい持つてお出かけしました。

神 準備なんかも時間かけて。

喜 時間かけてました。

梅 そう準備が大変みたいでした。一日終わつて帰つてくるとくたび

れちゃつて。その次は仕事にならない感じだね。

神 そうするとやっぱり一つのことには力が抜けない人でしたんでしょ

うね、やり始めると。

梅 慣れてないからでしょうね。だんだんと年数が経つ間に楽しく

なつてきたんでしょうね、学生さんを教えることが。だから、死

ぬ時も学校は辞めないぞつて言いました。続けたいつて。

神 学大に来られる時、田辺先生からお願ひされたと聞きました。

梅 なんかそのようでしたか。

喜 長い間せつてらっしゃいました。

神 田辺先生とは親しかつたのでしょうか。

喜 さあ、めつたに伺つたことはなかつたようですけど。

神 話をよくされていたような事を『篆刻講義ノート』⁽⁹⁾に書かれて

いたようです。

喜 吉田先生から伺つたんですけど、田辺先生みたくない方がい

らつしやるから学大へ行く事になったと聞きました。

喜 ああそうですか。

梅 なんか続木先生つて方が。

喜 続木先生、旅行の時なんか充分お世話になりました。

梅 母と父が、夏休みに九州・北海道に行く時、計画を立てて頂いて、

宿の心配などして頂いて。

喜 吉田先生にもお給料を送つて頂いたりして。

神 最初は学校へ行くのが大変だったんでしょね。

喜 慣れないからでしょうね。

神 学校へ行くようになる前、講習などされる事はなかったでしょう
か。

喜 あまり無かったんですけど、時々講習なども、鎌倉などへ。

宮 あまり人の前で大勢集めて話をする事は。

喜 ええ、嫌いでした。

神 本来が密室の仕事だから。

旅行の時の様子などは、一緒に行かれてどうでしたか。

喜 スケッチばかりしてました。

梅 それが目的みたいで、旅行に出たのでしようけどね。

神 絵を描かれるようになったのは寒山の影響ですか。

喜 それ以前、子供の時から好きだったらしいです。

神 それでは、幼少の時から絵も篆刻も書も一緒にやってきてたので

すか。確かに絵は書と似たジャンルだけど、書だけやっても大変

なのに、絵も手がけられたり、漢詩にも造詣が深いし、いろいろ

幅の広さを感じます。

喜 お習字は好きでしたね。暇さえあればお習字をしていました。

神 半紙に書いて。

喜 新聞紙です、表裏書いた、子供が小学校行ってる時、皆字書いた

新聞紙にお弁当包んで持って行きました。

神 普段、新聞に字書く事多かった。

喜 この机の上で書いて、むこう向いて。

宮 よくできた時など奥さんに見せることなどなかったんですか。

喜 いや、全然そんなことしません。いくら書いても上手に出来なかつ

たんでしょう。

神 書は何か古典見て。

手本見て書いていたこともあり、ただ、ただ筆を動かして書いて
いることも。

神 篆刻を刻されるのは少なかつたのですか。

梅 そうですね……。よっぽど気が向かなければ。

神 篆刻を刻されている時の姿はどんな感じですか。

喜 大変厳しい感じですね、篆刻の時は。子供達の声を出させないよ

うに気をつけてました。

神 刻し始めると一日中篆刻を。

喜 やって、気が向けばちよつと散歩に行つて。このあたりはいい所

でしたから、川が流れていて。

宮 善福寺などへは。

喜 ええ、善福寺へはしょつちゅう出かけていました。

宮 スケッチがありますが、動物、犬とか猫は好きでしたか。

喜 猫を貰つてきて「げん」という名をつけて飼つてました。子供達

が好きでしたから。

神 奥様が、作品集の後記で書かれてましたが、刻字なんかする時す

ごい剣幕だったと。

喜 ええ、板が割れないかしらと思う剣幕で刻つてました。

神 絵なんか描いている時は気楽に描いてましたか。

喜 そうですね。絵を描いている時は案外気楽でしたね。

神 東京学芸大学の卒業生の前田さんに聞きましたが「絵は教えられ

るが、篆刻は教えられない。」と、先生がおっしゃったと聞いたん

ですが。

喜 絵だつて教えられませんかね。

神 学校へ行くこと、学生に会うのが楽しみだったんでしょう。

喜 そうでしょうね、休まずに行きましたからね。

神 山田先生が親しくしてらっしゃった方、影響を受けた方、書や画

をやる上で、会津先生など。

喜 そうですね、会津先生だの、小川芋銭先生だとか、中川先生だと

か。

神 会津先生はここによく来られましたか。

喜 よくいらつしゃって下さいました。

神 そういう時、どういった話をされるのですか。

喜 面白そうに話してらっしゃいました。

神 お酒をちょびちょびやられながら。

喜 家じゃそんなご馳走はできませんから、お茶ぐらいで。

神 父親みたいな感じを持つてらっしゃいましたか。

喜 そうですね。

宮 タバコが好きだと伺ったのですが。

喜 唐紙など真つ赤になつてしまひます、タバコの煙で。

神 お話など好きでしたか。

喜 大好きな方がいらつしゃると、つかまえていて離さないで話して

いました。

宮 子供に対しては厳しかったですか。

喜 そうでもないです。大したことないです。

宮 やさしいお父さんでしたか。

喜 そうでもないです。やさしいつて程でもないです。

神 印象に残つていらつしゃること、ずっと生活をされてきて。

喜 普通の人でしたですね。

宮 案外そうなのかもしれないよ。

喜 面白い話ばかりしてましたです。みんな忘れてしまいました。

洒落が上手でしてね。

宮 歌なんかは。

喜 「おけさ」ぐらひは歌いますですね。

神 山田先生には決まつた弟子なんかはいなかつたんですか。

喜 弟子というのは嫌いなんです。

神 それでは自分では弟子など取るうとしなかつたんですか。

喜 そうです。

神 □□□さんみたいな押しかけ弟子は…。

喜 自分一人で篆刻をやつてきた。

のが一番楽しかつたらしゅうございます。

神 篆刻をやつて苦しいなんて言われた事は。

喜 一生懸命ですから、苦しいことなんてことないですね。頭から汗

流して、ガリガリガリ作品なんぞ作つてました。

宮 日展の審査員になつたからといつて喜ぶことなどはなかつたです

か。

喜 そんなことはないです。

宮 賞とか、何かになるといふことは。

喜 ええ、そうですね。

神 先生の根本の生き甲斐とは、篆刻そのものだったんですね。

喜 そうですね。

神 奥様として、私達に期待する事はありますか。たとえば、山田先

生をこういふ風に理解してもらいたいとか…。

喜 そういふこと言える頭を持つていれたいんですが…。血圧つ

ても困ります。どうも忘れてしやうがないと医者に言つと、動

脈硬化が頭に昇つちやたんですと言われ…。(笑)

宮 僕らにこういふことは曲げてとつてもらいたくないつて事もある

んではないでしょうか。

喜 ごらんになつた通りです。

神 家族にとつちやいいお父さんでしたね。

喜 ええ、いいお父さんでした。

宮 東大で法律学んでいる人で正平先生を好きな人がいます。隠れ

ファンも多いですよ。

喜 ありがたいことです。

神 学生なんかも此処によく来てましたか。

喜 学芸大学の方はよくいらっしゃってました。

神 中川一政先生とも会ってよくお話をされましたか。

喜 よく伺ってはご馳走して下さいました。

宮 きっかけは絵ですかね。

喜 篆刻の方ではないですかね。中川先生篆刻お好きですからね。ご自分でたくさんやってらっしゃいますからね。陶印をたくさん作ってらっしゃいますからね。こんな大きな引出しにいっぱい作ってらっしゃいますから。

神 結構気が合ったんでしょね。

喜 そうでしょうね。

神 僕らには分からない通ずるものがあつたのか知れませんか。

喜 幾度か中国へ行かれていますか。

神 そうです。

喜 長く滞在されたんですか。

神 最後に行った時は苦しいもんですから先に帰ってきて、皆さん置いて帰ってきたんですから。一番最初呉昌碩先生にお会いしに行つた時は、ちよつと長く半年くらい行つてました。

神 結婚された後すぐですね。

喜 ええ、すぐです。

神 中国には魅力があつたんでしょね。

喜 ええ、大好きでしたからね。

神 最後病気で帰ってきてお話をされましたか。

喜 してましたね。ご馳走になったとか、飛行機に乗せてもらつて一人で長沙の方まで行つたことなど嬉しかったようですね。長沙の

方へ二度目に行きましたんですからね。長沙が見たい、長沙が見たいって言つて、あんな体して行つてきた。

神 大変だつたらうな、帰つてまたすぐ病院に入られて。

喜 二ヶ月……。

神 病院でどういったこと、篆刻の話をしたり。

喜 いいえ、全然。お客さんがいらつしやると楽しそうに大笑いしてお話してました。亡くなる日なんぞ、お昼前篆刻なさる方ですけど、その方とそれこそ談笑されてました。急に発作が起こりまして……。

神 最後に会われた時何か言つてらっしゃいましたか。

喜 いいえ別に。だつてあんなに楽しそうに大笑いして話して、まさかと思ひましたよ。

神 よく帰りたいと言つてらっしゃつた。

喜 帰りたい帰りたいなんて言つてました。医者がお家はトタン屋根だそうでもとても暑いですよ、此処はこんな風通しもいいし、すばらしいからもう少しいらつしやいなんでね、なだめられて。先生はもうちゃんと分かつてらっしゃつたらしいです。何を食べてもいいからそれこそ近所にいいのがありましたから、よく買って食べてましたんですよ。

神 帰つてらして入院された時病氣は進んでたんですか。

喜 ええ……。

神 それは家族の方は知つてらっしゃつたんですか。

喜 いいえ、全然知りませんでした。

神 じゃあ、医者だけが。

喜 手術しよう手術しようなんて先生が言つてらしたんですけどね。亡くなつた時ああ……手術しなくて良かったですね、手術してたらそれつきりだつたんで。ちゃんと知つてらっしゃつたんですね。

神 びっくりされたたでしょうね、それほど元気でずつといらっしやっ
たのに、急にそういうことだから。
喜 暑いさなかでしたから。

四、周辺の人々とその交友2

- ・ 山田正平妻喜美子（喜と略す）
- ・ 閑き手 神野雄二（神と略す）
- ・ 年月日 昭和五十四年一月十六日
- ・ 場所 東京都荻窪山田家

神 今日はお父上の事、木村竹香老人と山田寒山和尚のことなどを
お聞きしたいと思えます。

喜 はい、そうですか、どうぞなにしろ頭がござつてますから。

神 奥様は、竹香老人とはよくお会いになられましたか。

喜 はい、よく東京へ出てきましたし、私もよく参りましたから。

神 非常に頑固な人だったと聞いたのですが、どんな感じの方でした
か。

喜 非常に几帳面な人でしたね。

神 話なんかはよくされましたか。

喜 話は上手ですね。私達とは違つて頭のいい方ですから。

神 竹香老人の作品は残ってますか。

喜 残つてはるはずなんです。押したものはあるはずで。細かいこと
をよくやりましてね。とつてもこまかい仕事をしてみんな立派な
ものです。

神 細かい手仕事が得意だったのですか。
喜 そうです。

神 山田先生によく似てらっしやいましたか。
喜 ああいう几帳面なことは正平にはできませんですから、本当に几
帳面で。

神 新潟で篆刻の仕事をされてたんですね。

喜 そうです。

神 こつちには山田先生に会いにこられた。

喜 それもありますね。いろいろお友達がいらっしやったから。

神 こちらの方にですか。

喜 そうです。狩野鉄斎という彫刻家の方なんかの所に訪ねてみえま
した。

これなんぞ、竹香先生が、羅漢印譜ですね。印面は寒山が刻りま
して、後でこんなお厨子こしらえたり、印譜を作つたり、竹香先
生がやられました。これはご覧になったことはあるでしょう。

神 一度もありません。外からはあります。

喜 これは誰だったのでしょうか？

この印材作りしたのは、違いますけど。これは新潟の大変いい
印材を作つた方で、印面は寒山が、羅漢印譜はこの箱の中に入つ
てます。こみだらけになつて、触るとホコリが落ちるんです。十

六羅漢よりも多くあります。観音様もありますし。
ここにございますのが、寒山和尚が作つた支那の寒山寺に贈りま
した分身です。小さい釣り鐘です。

神 十八体あります。

喜 観音様と何が多いんでしょう。

神 寒山和尚が、これ刻られている時など見られました。
喜 新潟の家で。

神 一晩で刻つてしまいました。これだけを。

神 一晚で。

喜 ええ。

神 かなりのスピードで刻られたのですね。

喜 ええ、これ蘭台先生が書いたものです。みんなそういう物をこいう風にして書いてくれて、竹香先生が他の先生の所へ持っていったのは頼んで書いてもらって、漆屋に頼んでこれだけの物を作りました。

神 山田先生は竹香老人についてあまり話されなかつたとか、なぜでしょうかね。安藤榻石先生が書いてありました。

喜 別に話したくないような、竹香先生つて人、そんな人じゃない、立派な人ですからね。大いに自慢してお話していい先生です。

神 体格なんかも大きい方でしたか。

喜 そうでもないです。中肉中背ですね。寒山和尚よりは大ききゅうございました。寒山和尚は小さかったです。(笑)

神 竹香老人の元に寒山和尚はよく行かれてたのですね。

喜 はあ、ごく親しくしていましたからね。

神 山田先生のことを気に入って、そして寒山寺の方に。

喜 寒山寺が下谷にありました時に。

神 山田先生は甘い物なんか好きでしたか。

喜 ええ、食べましたよ、余計なんですけどね。甘い物よりはお酒の方がよかったです。お酒だつてそうたいして、お客様でもあれば。

神 毎日晩酌してたわけではないですか。

喜 晩酌は、ええしてました、少しずつ。

神 酒飲むと上機嫌になつて。

喜 そうなんです。すぐ寝てしまつて…。

神 寒山和尚は楽焼が好きだつたそうですね。

喜 楽焼の道具を持つては、滄浪閣へ伊藤博文さんのいらつしやつた

とこ、熱海大磯にございましてね。荷物持つては出かけて楽焼を。楽焼は釉薬のかかつている盃を焼きますので、炭火で焼きますから、簡単に焼けますから。伊藤さんなんぞに書いてもらつたり。お客様でもあると呼ばれて楽焼して、博覧会なんぞあると焼いて。

神 お茶碗も

喜 お茶碗も、抹茶のお茶碗なんぞ、本焼はできませんから、商売人の所へ絵づけだけして頼んで。

神 伊藤博文ですか。

喜 随分世話になりました。

寒山寺の釣鐘が無くなつたのを心配しましてね。そして、実は釣鐘捜しに行ったのが、本当は捜しに行ったのではなくて、呉昌碩に篆刻を習いに行きましたんですよ。そして、行つてるうちに、あちらへ本願寺の布教師が松林孝純つていう人ですけれど、あつちへ行つてまして、寒山つていう名前なんだから寒山寺の住職になつてくれなかつた。実は私は寒山寺の住職してらんだけけど、日本に帰らなければならぬから、代わりにやつてくれまいかって。そして引き受けてしまいました。そしてあの有名な「月落ち烏啼いて」の鐘がないことが分かりまして。それじゃ鐘捜す方が本願だつて、鐘を捜したんですが、無くつて。長髪族の闘いの時、日本人が持つていっちゃつたつてことが分かりまして、それじゃ申し訳ないことをしたと。それじゃ日本へ帰つて捜して持つてきますと言つて、そして篆刻の方はそこそこにして帰つてきましたね。それでいくら捜しても無いんです。そして自分の手で捜したんじやとても埒があかないから、伊藤さんに頼んで全国の新聞に広告して、随分いつまでも捜したんですね。とうとう出ないもんですから、どうしようかつて。それからどうしようかなんて

言っているうちに、何か汽車に乗っている人が、山田寒山があんな事言つて鐘捜しているけど、鐘はどうしても出てこやしな。能登のお寺でつぶしてしまつて自分の釣鐘に入れちまつたら、出ないという事が分かりまして。それからそれじゃしようがないと、伊藤さんに銘を書いてもらつて新しく作ることにしました。そして三尺三寸の釣鐘を日本郵船の船で送りましてね。今寒山寺に吊り下げであるそうです。

神 いったか正月の除夜の鐘に鳴らしたことがあるようですね。

喜 一度新聞に出てたと思います。

神 ああ、そうでしたね。

喜 貧乏ばかりしてましてね、面白い人でした、私の父は。

神 何か新しい物が非常に好きだつたとか、人力車とか。

喜 ええ人力車は大好きでした。下谷に居りましたから、下谷で一番の足の早いのが近所におりまして、毎日御用聞きに来るんです。電話が引かるといふと、すぐ電話を引きますし、電機がつくとすぐ電機、それこそもう自動車なんぞ真つ先に乗つかつたんでしようが、自動車はなかなか高値の花で。千枚描きだなんて、一日千枚描くなんて言つて、健筆会つてのがありまして、前田黙風つてのがやつてまして。

神 絵の方ですか

喜 そう、竹を描いてまして、前田黙風先生が大将になってましてね。日本美術協会のものがあつましてね、そこでいつでも展覧会していつもそこへ行つちや千枚描きだなんていつて、本当は千枚なんてとても描けないでしょうけど。新聞広告しましてね、新聞の切り抜き持つてきたらタダで描いてやるなぞ言つて。

喜 楽焼をやつてみたり。

神 仕事としては。

喜 篆刻をやつておりました。篆刻やつたり書を書いたり、竹を描いたり、書を書くより竹描く方が早いなぞ言つて。

竹は大変描いて残してあるはずですよ。

神 よく話をしてみましたか。

喜 話は上手でした。それこそ忙しくてしようがないと言つて、じゃあ五分間でお断りだなぞ言つて、さあ、話が弾むといつまでも引つ張つてお話ししてまして。また話が上手なもんですから。

神 やつぱり画とか楽焼の話、多かつたんですか。

喜 そうでしょうね、それにお付き合ひしている人が面白い方ばかりですから。話がそれからそれへと弾みます。頭がいいですから、忘れないで。

神 正平先生は寒山和尚とよく話をしてみましたか。

喜 話してたんでしよう、同じ趣味ですから。

神 篆刻を同じ部屋で刻したりしたのでしょいかね。

喜 滅多にないでしょうね。

神 何か本当にいい和尚だつたと、正平先生が文に書いてましたが、その事に尽きるのでしょいかね。山田先生は竹香老人と寒山和尚とどちらの方が影響を受けてますか。

喜 さあ、それは、竹香老人の方がいいんじゃないですか。子供の時から仰つて居るんですから。

神 篆刻なんかは寒山和尚の方に影響を受けて居るんでしょいかね。

喜 はあ、何しろ忙しく跳んで歩いてますからね、座つて教えてるなんて事ないですから。

神 家にあまり居なかつたんですか。

喜 ええ、滅多に居た事ないです。

神 痔が悪うございまして、悪くなると家に帰つてきて寝てました。とうとう痔ろうで亡くなりました。

神 何歳で。

喜 六十三でした。同じ年ですね、正平と。

神 何か因縁があるのかな。

喜 寒山和尚亡くなられて、山田先生はよく寒山の事話してましたか。

神 よく話してました。面白かった事を。

喜 部屋は同じ部屋に居ましたか、寒山と正平先生。

神 家に居ます時は同じ部屋におりましたけど、たいてい留守でしたから、お友達が多いもんですから。

神 じゃあ、夜なんかも帰ってこないで。

喜 そうでもないです。

神 寒山和尚のお墓は。

喜 紀州の二紀島という所に、本当は永平寺のお坊さんでしてね。お坊さん修行しまして、その紀州のお寺に埋まっています。

神 竹香老人のお墓は何処に。

喜 新潟にあります。

神 寒山和尚の友達はどうな人が、篆刻の人が多かったですか。

喜 そうですね、絵描きさんが多かったですね。中村不折さんは根岸にいらつしゃいましたから、しじゅう遊びにいらつしゃいまして。

神 あの方書を書かれますから、書道博物館ってのこしらえていらつしゃいます。

神 他にはどのような人、尋ねて来ましたが。

喜 いくらでもいらつしゃったんですよ、浜村蔵六、篆刻の、あと…

神 人様の名前忘れるのおびただしいのですよ。

神 お母さんは。

喜 八十几つで亡くなりました。

神 お母さんはどういう人です。

喜 気の強い人でした。間違った事が大嫌いで、竹香先生の奥さんは

やさしい人だったらしゅうございます。竹香先生が片人で、もうちよつと曲がつた事でもすると、大変叱られて苦労されたようです。

神 正平先生はどちらの影響を。

喜 …(笑)。

神 寒山和尚と正平先生と一緒に篆刻したこと覧になった事は、画を描いたり、字を書いたりしているところなど。

喜 そんな事はなかったでしょうね。字を書いている事はあつたかも知れませんが。

神 寒山和尚は趣味が多かったですか。

喜 本心に趣味は多かったですか。

神 小川芋銭先生はよくいらつしゃいましたか。

喜 下谷に居ります時はね。牛久は上野の駅から行きますからね、よくお見えになりました。こちらでもよく伺いましたし。一番

尊敬してました。絵描きさんで。

神 正平先生が。

喜 ええ。

神 正平先生と芋銭先生の最初の出会いは。

喜 お友達からでも紹介されたんでしょう。

神 どういう所を尊敬されてたんでしょうかね。

喜 立派な方ですからね、本当に立派な方でした。

神 やつぱり曲がつたことの嫌いな。

喜 そうですよ。

神 山田先生はよく芋銭先生について語られましたか。

喜 ええ、芋銭先生の事はよく伺って、小豆かなんかでお酒飲んでらしたとか、よく伺って。

神 家に芋銭先生がいらつしゃった時、絵など描かれましたか。

喜 いいえ、家へいらしては描きにならないですね。大急ぎでお帰り

になられて。

寒山和尚の居る時は芋鏡先生はいらっしゃいませんでしたけどね。下谷の家で亡くなつたんですけれど、寒山和尚は。下谷の家へ芋鏡先生いらして下さいました。

神 じゃあ、ちよつと立ち寄つてすぐ帰られたんですね。

喜 そうなんです。

荷物なんか預けたりして、ちよつとした頼みものいらしたりして。

神 中村蘭台先生なんかよくいらつしやいましたか。

喜 ええ、よく下谷の家にはいらつしやいました。

神 毎日いろんな方がみえたんですね。

何かカッパが、芋鏡先生はお好きだったんですね。

喜 ええ、カッパの傑作が家にあるんです。

神 それは正平先生が頂いたのですか。

喜 ええ。

神 正平先生は、朝起きるとまず何をされましたか。

喜 そうですね、まずタバコを吸つて、お習字始めるでしょう。

神 朝は何時頃起きられるんですか。

喜 朝に早いんですよ。

神 じゃあ、七時頃には、もつと早く。

喜 もつと早い事もあつたでしょう。

神 夜寝るのは。

夜寝るのはやつぱり早いですね。仕事の都合で。

散歩が好きでしてね、よく散歩をしました。

神 タバコを吸つて習字して、そして疲れたら散歩に行つて、お風呂に入つて。

神 一日のうちでお習字していたのは。

喜 朝していました。

神 夜はあまり。

喜 しない事はありません、気が向けば。

神 朝から夜までずつと勉強されましたか。

喜 本読んでいる時はね。

神 机に座つて。

喜 ええ、机に座つて。建て替えたんですね、前の通りそのまま作りました。

神 スケッチはずつとされてきましたか。

喜 一生スケッチやつていたようなものです。必ず小さいスケッチ

ブック懐に入れて出掛けてました。善福寺も近いですから。善福

寺だとか、井の頭だとか。

神 スケッチしている時の様子はどうでしたか。

喜 普通です。

神 鉛筆で。

喜 ええ。

神 色をつけるのは。

喜 掃つてきて旅館で。

神 じゃあ、絵具を持つて。

喜 ええ、旅行の時は小さい絵具持つて行きました。

神 その他旅行に行く時何を持つて。

喜 スケッチブックと絵の具だけぐらいですね。

神 絵なんか特別に学校に行つて習われたことは。

喜 写生を習いに行つたことがあります。お友達の所へ行つて、モデルが来ると写生して、大した事しておりません。

神 絵は独学で。

喜 ええ、

神 絵も書も篆刻も、すべて独学で。

喜 そうですね

神 絵描くの好きだったんですかね。

喜 ええ、子供の時から好きだったようです。

神 絵の先生といえば小川芋銭先生。

喜 先生といえるかどうか、芋銭の影響は受けてますですね。

神 スケッチ旅行は日本中行かれたんですか。

喜 そうですね。九州なんぞよく行きましたです。

神 汽車に乗っている時、何されてましたか。

喜 汽車の中では本読んでいることありました。写生したり。

神 正平先生は怒られたりした事ありますか。

喜 そうたいして。

神 学生がカミナリ落とされたり、怒られたりしたとか、学校で出さない大声で叱られたりとかされたようですが。あまり怒る事はなかつたですか。

喜 そうですね。そう、気に入らない時は少し怒りますけど。

神 正平先生の一番の楽しみは何だったんですか。

喜 旅行でもしている時が一番楽しいんじゃないですか。

神 篆刻をやっている時の様子はどんな感じでしたか。

喜 それこそもう側へも寄り付けないような、汗びっしょりかいて、冬でも汗っかきでした。

神 篆刻やっている時に部屋に入ると怒りましたか。

喜 怒られそうですから入らない。子供達も寄せ付けないようにして、せつかく印のできかけた時に邪魔しちや悪いと思つて。大変な剣幕でした、仕事している時は。

神 音もよく聞こえましたか。

喜 ええ、額なぞ刻る時は大したものでした。

神 大体一つ刻りあげるのにどれ位の時間を。

喜 二日もあつたら出来るんじゃないですか。額なぞ大きい物も、だ

神 いたい一日位で出来たんでしょうか。

喜 いつきに刻り上げたんでしょうか。

神 ええ、いつきに。

神 ノミなんかは。

喜 自分で研いでいました。

神 叩くのは。

喜 木鎚で。

神 どういうかっこして。

喜 皿の上で座つて。

神 木額はどれくらい刻りましたか。

喜 どれくらいありますか。

神 百くらいですか。

喜 全部で百じゃどうでしょうかね。旅行しても刻つてきました事もありますね。

神 かなりたくさん。

喜 たくさんあると思います。その内でなかなか気に入らないと割つてしまつたりします。

神 木額とか印の注文なんかあつたらすぐ刻られましたか。

喜 なかなかそうはいきませんですね。

神 気が向いたら。

喜 ええ、気が向かないと仕事手に付かないらしいですね。

神 山田先生、お茶入れるのが上手だったらしいですね。

喜 ええ、とても上手でした。私達が入れたのは気に入らないらしくて。竹香先生が上手で、お茶の名人だったようです。竹香先生

神 はお茶の先生みたいでした。

神 正平先生は学生が好きだったんですかね。

喜 そうみたいですわね。

神 よく展覧会なんか見に行かれましたか。

喜 ええ、よく行っていましたですわね。

神 テレビは当時なかったですわね。

喜 いいえ、梅蘭芳の時なんか近所へ行って見せてもらいました。中

国の舞楽の、綺麗な人でした。男の人でしたけど。

神 テレビとか映画はよく見てられましたか。

喜 ええ、よく見えました。

神 ラジオなんかは。

喜 いいのがあれば聞いてました。

神 どういったものが好きだったんでしょうか。

喜 いろいろでしたわね。

神 今日は貴重なお話し有難うございました。

喜 何のお役にも立ちませんで。

五、結

本稿で紹介した身近な近親者である喜喜美子へのインタビューは、正平の日常の姿を如実に見せてくれている。彼の篆刻にかける峻厳さとともに家族へのおもいやりや、親子の交流が見られまことに興味深い。これは正平が東京学芸大学において学生に対した情愛に類似するものである⁹⁾。これらは片言隻語といえども、正平の事蹟や篆刻観そして人物像を語る上で得がたいものである。家族の語から、これま

以上に、正平の篆刻が学問研究と深く結合したものであり、多くの芸術家との交友の中で生み出されていったことが詳らかになった。また巻の気や金石の気の横溢した馥郁たる印が数多く生み出された根本を理解できたのは幸いであった。

優れた芸術が生まれる要因は必ずしも一概ではないだろう。しかしその環境や人との繋がりには大きい意味を持つ。彼の逸格の書境も稀有の人格も、おそらくは家族愛、人間関係に拠る所が大きい。安藤搦石「歴訪・山田正平」(『書品』九八号、昭和三十四年四月)において「山田正平は、そのような時代の余映のうちに、寒山を中心として当時の芸術家の書境にも触れ、生活の仕様も見かつ聞き、芸苑の名門山田家の後嗣として亡養父寒山の知友の間に残された仄だ。」と述べている。確かに山田寒山から受け継いだ人間関係も在るが、正平の類稀な才能と芸術に惹きつけられた人も多いだろう。正平の印が日本の篆刻の中でもひとときわ光彩を放っているのも当然と言える。今後、山田家に残された画帖日記、篆刻隣義ノート、諸家からの書簡を精査し、正平の事蹟や篆刻観、諸賢との交友を明らかにしていきたい。

本稿執筆にあたり、山田潤平氏・梅枝氏はじめ山田家の皆様にはご教示、ご便宜を頂いた。記して謝意を申し上げます。

(註)

- (1) 拙稿「篆刻学」(『中国書法史を学ぶ人のために』杉村邦彦編、世界思想社、平成十四年九月)
- (2) 江戸時代中期になると、印聖と称される高芙蓉(享保七年—天明四年、一七二一—一八四)が出現する。彼により、今体の卑俗な弊風は一掃され、古体派が打ち立てられた。芙蓉の復古的刻風は門下の印人により広く流布された。京都・浪速・江戸のみならず地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派は栄えた。その一派は日本篆刻史上まさに高峰をなしている。正平による最も初期の印譜に、高芙蓉の模刻が見える。
- (3) 山田寒山を研究する時に、山田家に所蔵される寒山閑連の新聞記事の切り抜きを貼り込んだスクラップブックは貴重である。同資料は平成十五年度全国大学書道学会徳島大会において紹介しその価値を論じた。また、『国

語国文研究と教育」第四十三号（熊本大学教育学部国文学会、平成十八年二月）において「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田稜山関連記事見出し一覧稿」と題し、見出し一覧の索引を作成し、より詳細に論じた。切り抜きは、東京市京橋区采女町廿二番地にあつた東京切抜通信社による。新聞は全国紙に亘っており、重複する記事も多い。また新聞は古く劣化がすすんでおり、文字不明の箇所や、新聞名さえ判読できないものが数多くある。ただこれは稜山研究にとつて一般の資料である事はいうに及ばず、当時の芸壇の風流を知る上で欠くことが出来ない。これを既むに彼の生涯、芸術観、芸苑での逸話などがあり興味は尽きない。これから稜山の伝記、芸術（詩、書、画、篆刻、陶芸）また当時の芸壇、印壇の様子などがうかがえる。

(4) 高芙蓉を祖とする芙蓉派の一系譜に、源惟良、小俣蛭庵、福井端隠、山田稜山、山田正平等がある。都立中央図書館（加賀文庫）に邦人印譜を蔵するが、『蛭庵印譜』（二秩二冊）に、稜山の刻風に極めて類似する印がある。字形と線質が近似している。また三重県立図書館に収蔵する『彫虫館印譜上・中・下』（宝暦六年刊）、『福井端隠先生印譜』（十二丁、折本、刊行年等不詳）の刻風からも篆刻の継承が分かる。

これらの印譜見るにつけ、稜山の談話記事『鉄筆閑話』（山田家蔵新聞ファイル）で、「芙蓉派と申しませば、高芙蓉―源惟良―小俣蛭庵―福井端隠と伝ひ、私まで、五世です。」と述べていることが実証できる。

(5) 中井敬所の「印人伝」は、わが国の印人伝における唯一の専著と言えるもので、好著である。中井敬所の「印人伝」に関して「日本印人研究―中井敬所の高芙蓉研究―」（『大学書道研究』第一号、全国大学書道学会、平成二十年三月三十一日）で考察した。わが国における印人伝の最初の編纂は、文化文政の頃、永根伍石により行われた。しかし、現在では佚して伝わらない。「日本印人伝」は、中井敬所の未完の稿本を、敬所の七回忌である大正四年（一九一五）に、女婿新家孝正の手により上梓されたものである。

。校正にあつたのは姪の石川文荘と門人の岡村梅軒を中心とする六人である。本書は未定稿であるものの、わが国印人伝の唯一の著述であり価値あるものといえる。同著は「日本の篆刻」（二玄社）に水田紀久先生による副読校注が掲載されている。さらに『続補日本印人伝』の増訂がある。

(6) 山田正平に関する年譜はこれまで数種編まれていた。中でも最も基本資料となるのは、正平自身が昭和三十三年に作成した「自記年譜」（『増補版山田正平作品集』木耳社、昭和五十九年七月）である。これは原稿用紙三枚にわたりペン書きされたもので、明治三十二年正平の生年から、昭和三十三年正平六十歳まで、かなり詳細なものである。これ以外に、正平自身作成した略年譜が三種類ある。昭和五十九年に開催された「第三回山田正平遺作展」に出陳された「毛筆履歴書」は、正平の芸術を語る上で、重要な内容となっている。他は覚え書き程度である。

さて、山田正平は日頃スケッチをすることが多かったが、それにはその時々足跡が克明に記されており、画日記ともいふべきものになっている。これはスケッチブックやノートに書かれており五十数冊にわたっている。筆者は、かつて山田家のご承諾を得て、詳細な年譜を作成すべく、スケッチ帖、並びに関係資料を複写させて頂いた。これらは年譜作成に欠くことのできない貴重な一般資料といえる。

次に、正平没後編集された年譜がやはり数種ある。「山田正平作品集」（木耳社、昭和五十一年十月十日）に収められている年譜は最も詳しいものである。これは、山田正平妻山田喜美子、元昭和学院教師関健一、並びに東京学芸大学名誉教授小本太法先生などにより作成されたものである。また、これと記載はほとんど同じであるが、「止道人山田正平先生の書簡」（佐藤耐雪編著、佐藤耐雪後援会、昭和五十四年一月十六日）に年譜が附されている。

これ以前には三種の年譜がある。その一は、伏見冲敏が作成した「山田正平先生略年譜」（『書品』一三五号、一九六二年）である。その二は、昭

和三十九年八月に中央公論画廊で開催された「第一回山田正平遺作展」の時に刊行された図録に附された「年譜」(「山田正平遺作展」中央公論美術出版)である。その三は、昭和四十六年十二月に魅丹古美術道出版会より孔版印刷出版された、東京学芸大学卒業の高橋達郎氏の卒業論文「山田正平版」に附されているものである。

筆者は、山田正平に関して過去四度にわたり年譜を編み系図を作成した。ここに列記しておく。

1、山田正平年譜・山田家系図(「増補版山田正平作品集」前掲)

2、山田正平年譜・山田家系図(「山田泰山・正平展図録」篆刻美術館、平成四年十一月)

3、山田正平略年譜(「風」通巻第一五二号、芸術新聞社、平成十三年十月)

4、「山田正平年譜」附、山田家系図并に山田正平研究文獻目録(「山田正平展」募作な文人篆刻家、篆刻美術館、平成十六年九月)

筆者は山田家に遺された正平が描いた画帖日記の書き入れをすべて含んださらに詳しい年譜を用意しているが、改めて紹介したい。

(7) 山田正平に関する文獻目録は、「山田正平年譜」附、山田家系図并に山田正平研究文獻目録(「前掲」)に載せた拙稿「山田正平研究文獻目録」が最も詳細なものといえる。また、宮澤昇氏により「印人・山田正平の人と芸術―面人磯部草丘との交流と新資料を含めて」(蜚泉堂、平成十六年六月一日)に「工具書(参考文獻)」として掲載されている。

(8) 拙稿では、西川寧、伏見冲敏、保多孝三、古川悟、山田桃源、鈴木知秋、長曾我部木人、小林斗宣、今井凌雪、田邊青麴、大久保翠洞、田辺萬平などを取り上げた。(「山田正平研究」周辺の人々とその交友(Ⅰ)―(「広島文教人間文化」第三号、広島文教女子大学人間文化学会、平成十五年三月三十一日)、(「日本印人研究」山田正平をめぐる人々とその交友(続)―「書法漢学研究」第一〇号、書法漢学研究會、平成二十四年一月刊行予定)

(9) 「篆刻辯義ノート」は、山田正平が東京学芸大学で辯じた辯義の下四ページのノートを、書道科同窓会「硯心会」の有志が總めたもので、これまで二回刊行されている。目次を挙げる。

○「山田正平先生篆刻辯義ノート」(東京学芸大学書道科同窓会硯心会 昭和三十八年六月二十二日)

・田辺萬平「序」

・伊東寿「遺稿に学ぶ」

・鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」

・吉田繁「思ひ出の断片」

○「回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻辯義ノート(復刻)」(東京学芸大学書道科硯心会、平成十六年七月二十日)

(十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シンポジウム開催される。(シンポジスト 小木太夫、杉本翠香、塚本虚斎、益子

素州、神野大光)

・蔵元剛征「こあいさつ 感化―山田正平展に寄せて―」

・山田正平展展示資料

・「山田正平先生を語る」シンポジウム

・「篆刻辯義ノート(復刻)」

・山田正平年譜

・岩切誠「あとがき」

本研究は、平成二十三年度科学研究費補助金「基盤研究(C)課題番号K M 10012152014400」の助成を受けたものである。

(じんの・ゆうじ 熊本大学教育学部教授)